Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

056

保育者の成長における実践と省察

吉村　香　（お茶の水女子大学大学院）
吉岡晶子　尾形節子　（お茶の水女子大学附属幼稚園）
田代和美　（お茶の水女子大学）

問題意識

保育者が実践年数を単に長く継続することを「成長」と定義することに、筆者は問題意識を抱いた。保育者の成長が時間に依存するという考え方は、次の2つの危険を含むと考えられる。

1)時間の経過が成長をもたらすという安直な考えを導き、保育の惰性を容認する。

2)一種の「成長した保育者像」を想定しかねない。

以上2点は成長を「結果」ととらえることに起因していると考えられる。そこで成長を「過程」ととらえる立場から、現時点に依拠する成長を探る必要があると筆者は考えた。

研究目的

本研究は事例分析によって、保育者の実践と省察の循環過程を明らかにし、省察の機能および保育者の成長との関連を解明し、従来曖昧な認識のもとに多用されてきた「省察」「保育者の成長」を明確に定義づけることを目的とする。ただし本研究で述べる「成長」は、上述のように保育者1人ひとりの現時点に依拠する成長である。

研究方法

1.2名の保育者を対象に保育実践を継続的に観察する。実践中は保育者の胸元にマイクをつけ音声を録音する。
2.実践後の省察内容をインタヴューで聞く。保育者は、筆者の観察記録を見ながら省察を行う。インタヴュー終了後、実践中の録音テープを渡し、即日聴いてもらう。
3.翌日同じ実践場面についての省察を行い、インタヴューする。
4.3カ月後にも一連の実践と省察の過程を想起して省察を行い、インタヴューする。
4.事例を分析し考察する。

事例分析の視点

1.実践と省察の関連を読みとる
2.筆者の観察記録が省察にもたらした影響
3.省察時に筆者が関与したことの影響

★なお本研究で扱った事例は、実践中の無意識的なとらえが意識化されることが重要な要因となって保育者が実践上の問題解決をするに至ったものである。

分析結果

1. 実践と省察の循環過程およびより大きな循環経路

＜実践＞子どもや組の現状,問題点を無意識的にとらえ、そのとらえに基づいて保育行為を判断している。

＜保育当日の省察＞実践中のとらえを意識化し、問題点を認識して解決方法を熟考する。保育行為の妥当性を場面に即して具体的に検討する。

＜翌日の実践＞保育当日に省察したことを意識して実践し、場面の中で確認もしくは修正する面がみられる。

＜翌日の省察＞子どもや自分の現状,問題点を自分のかかわり方との関連でとらえ直す。実践や自分自身について客観的に検討する。

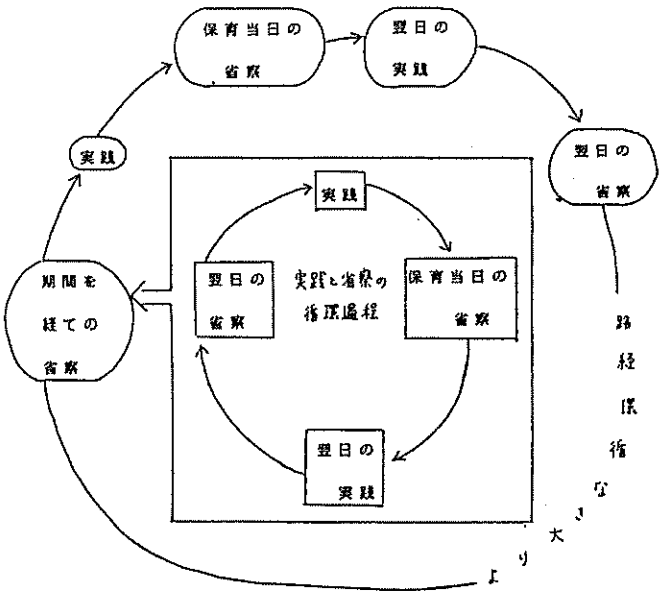
上記のように保育者の取り組み過程は、実践と省察が関連しつつ循環している。

＜期間を経ての省察＞一連の過程を概観し、過去との比較で実践や自分の現状を把握したり、当時とは別の視点で保育行為の妥当性を検討する。

期間を経て再び省察することによって、実践と省察の循環過程を内包する、より大きな循環経路が形成される。

下図は実践と省察の循環過程とより大きな循環経路の関係を表す。

実践と省察の循環過程とより大きな循環経路の関係



NII-Electronic Library Service

2．時間の経過に伴う省察の変化

保育当日には保育の当事者の立場で、場面に即した具体的な省察がなされたのに対し、翌日には保育当日に比べて省察内容が客観的になった。3カ月後になると、省察内容はさらに客観性が増した。

3．筆者の存在の影響

筆者の観察記録が保育者の省察内容を決定づけたり、省察の進行を左右することもあった。

しかしそのような場合でも、保育者が自分の問題意識を明確に自覚していたため、自分の保育記録として、その観察記録がどのような過不足があるかを検討しながら読んだことにより、筆者の観察記録を省察の有効な手がかりにすることができた。

省察時の関与に関しては、省察の聞き手としての筆者に対し保育者が、実践場面の状況や背景について説明したり、自分の考えに理解を求めるような話し方をすることがあった。

考察

1．繰り返し何度も省察することの意味

保育者の省察は、保育当日には保育の当事者の立場で、翌日には第三者的な立場でなされ、期間を経た省察ではさらに当事者意識が薄れ、省察の客観性が増した。

つまり前頁の図の循環過程を何度も繰り返すことによって保育者は、保育の当事者の立場で実践を具体的に検討したり、時間の経過とともに当事者意識が薄れて、より客観的に実践の検討をしたりする。様々な立場から省察を行う結果、保育者は多角的な視点を獲得することが可能になる。

★当事者意識＝当該事例に関して保育者が、その時その場で抱いていた実感

2．第三者の観察記録と省察時の関与の意味

第三者の関与もまた、他者の視点を取り入れて自分の視点と突き合わせ、保育者が多角的な視点を獲得することに寄与する。

ただし観察記録を省察の手がかりとして用いる場合保育者は、記録者の視点を取り入れつつも、自分自身の視点を確認しながら読むことが重要である。

また省察内容を言語化して第三者に伝えることに関しては、伝える相手がいることで省察内容が決定づけられたり、方向づけられることがあるのがわかる。

★省察時の関与＝筆者は、保育者が省察内容を言語化して伝える相手としてそばに座り聞いているだけでなく、必要に応じて保育者に意見や感想を述べた。

3．多角的な視点の獲得と保育者の成長

自分独自の視点にのみ基づく実践中のとらえは、保育者個人の真実ではあっても普遍的な真実とは限らない。実践と省察の循環過程を意識的に繰り返し、多角的な視点を獲得しつつ、とらえを積み重ねることによって保育者は、常に翌日以降の実践における判断形成を行っているのである。

つまり多角的な視点を獲得することによって保育者の実践や自分自身についてのとらえが普遍性を増し、それ故に実践上の問題解決に有用な判断形成をし得るのである。

省察の定義

上記の知見から筆者は、保育者の省察を次のように定義した。

第1に、実践中の無意識的なとらえを意識化すること。

第2に、保育者自身の現状や実践上の問題点を認識し、問題解決の方法を熟考すること。

第3に、実践の妥当性を多角的に検討する。

保育者の成長の定義

現時点に依拠する保育者の成長を、筆者は次のように定義した。

すなわち、多角的な視点の獲得を伴う実践と省察の循環過程を意識的に繰り返し、循環過程がより大きな循環経路に位置づくことによって、保育者の子どもや自分自身についてのとらえが普遍性を増すことである。

本研究の意義

保育者の省察の機能が様々に論じられ、また「成長」,「省察」ということばが多用されてきたにもかかわらず、双方とも曖昧な認識の中で随意な解釈によって言及されてきたことは前述のとおりである。保育者にとって実践後の省察が重要であることは認められていたものの、実際に省察を分析してその機能を解明した研究がなされなかったためである。

そのため「保育者の成長」も、園内研修等、成長を目的とする場のあり方を研究しながら、成長そのものの定義が曖昧であったり、もしくは時間的量的経験の蓄積によって必然的にもたらされるものとして認識されてきた。

筆者はその点に着目し、保育者の省察を直接対象とする研究を行ったのである。その結果、省察の機能を保育者の日常の中から事例分析によって解明し、「省察」および「保育者の成長」を明確に定義づけることができたことは、本研究の独自な意義といえる。

また現時点に依拠する成長への着眼も、本研究の独自性を示すものといえよう。

NII-Electronic Library Service